

降誕祭あれこれ

司祭 ニコライ・ドミートリエフ

齋

齋については、正教会の聖師父や聖人たちが、さまざま面から、さまざまな表現をもつて私たちにその意味や大切さを教えている。

ところが、齋というとロシアでも日本でも話題になるのが、まず「食品リスト」。

ロシアのある神父さんの話——齋期を前に信徒たちと語らう機会があった。神父さんは、「そろそろ齋ですね。聞きたいことがあったら、何でも聞いてください。できる限り答えましょう」と言った。するとすぐに手が挙がった。「神父さん、齋の間、日曜日以外の日に魚を食べても良いでしょうか」。次々と手が挙がり、かなりの時間が経った。忍耐強く一つ一つの質問に答えていた彼は最後にため息混じりに言った。「私はずっとあなた方の質問を聞いていたが、全部食べ物に関する質問ばかりだった。何を食べても良い、何を食べてはいけない…。齋の間の祈りや痛悔、霊的なことに関する質問は一つもなかった」。

齋とは、人間が天地創造の時に創られたときの本来の人間の本分に立ち返る期間である。正教会は人間の本分を「神を認識し、神に倣い、神のごとくなること」と教えている。霊的な齋と肉

降誕祭の齋(フィリップの齋)

冬の教会暦の中で、大きな祭日というところの降誕祭である。正教会では、重要な祭日の前には、齋日や齋期が設けられている。これは各信徒が、来る祭日の霊的意味を深く理解し、その祭日を迎え祝うに相応しい霊を準備するための期間である。

降誕祭前の齋期は、四十日間。一月七日の降誕祭の四十日前は、十一月二十八日——これが降誕祭の齋の始めとなる。



ここで、一つのニュアンスがあるのが、「齋期前日」。ロシア語で「зарождение(ザーガヴェニエ)」という。とりわけ「齋期前日」と言うからには、幾つもの意味がある。一つには、それまでの通常の生活から、急に齋期に突入しないため。心の段階的準備のための一日である。つまり、明日から降誕祭を迎える準備の期間に入るのだということ。各自が心の中で認識する一日である。もう一つの意味は、棚や冷蔵庫の中に齋期において食することができない物(肉料理、卵、牛乳、アイスクリームなど)があったら、この日のうちに食べてしましましょうという整理の意味。心(霊的な意味)も台所(物質的な意味)もきちんと整理する大事な一日である。

降誕祭の場合、「齋期前日」は、十一月二十七日。聖使徒フィリップの記憶日と重なる。このため、「降誕祭の齋」は、「フィリップの齋」とも言われる。



体的な齋のバランスを保つことができたとき、初めて「実りある齋」となる。

齋を行なうときは、自己満足や怠惰に陥らないように、教会の神父さんの教導に従うことが必要である。なぜならば、齋とは、人間を苦しめるためのものではなく、人間を真に生かすためのものだからである。

いつ降誕祭を祝うのか

この記事の最初に、降誕祭は一月七日であると書いた。世界の正教会の中には、一月七日に降誕祭を祝うところもあるし、十二月二十五日に祝うところもある。世の中の人は「どちらが本当の降誕祭ですか」と質問してくる。

ロシア正教会渉外局長府主教キリル座下は、このような質問に次のように答えている。

「私たちは、『日付』を祝うのではなく、主・神が人間の体をとつて、この世に降誕されたという事実をお祝いするのです」。

どちらが本当の降誕祭で、どちらが本当でない降誕祭ということではない。各教会の信徒は、自分の教会の祝福に従って、お祝いするのが良い。

サンタクロースをどうするか

ロシアでは、降誕祭のお祝いと「サンタクロースは無縁だった。もともと降誕祭のご祈祷とサンタクロースが関係ないのは、正教会の奉神礼上明らかである。しかし所謂「西側」においてサンタクロースというキャラクターは、「クリスマス」とあまりにも密着している。その波は、ついに新生ロシアにも達した。

そこで持ち上がったのが「サンタクロースをどうしよう?」という正教会の降誕祭におけるサンタクロースの位置づけ(扱い方)の問題である。

いろいろな意見が現れた。「正教会では、十二月十九日にきちんと聖人として奇蹟者聖ニコライを盛大に記憶するのだから、それでよろしい」。

または、「正教会は常に真実を信徒の前に現してきた。トナカイののつて煙突からプレゼントを持っ

てくるサンタクロースという架空のキャラクターを正教会が積極的に取り入れると、子供たちが大人になって、教会で聞いた話に真実と真実でない部分があることがわかったとき、多かれ少なかれ落胆するであろう」。または、「主の降誕自体がおとぎ話的なニュアンスを帯びてしまう」などだ。

モスクワ及び全ロシアの総主教アレクシイII聖下は、ある新聞のインタビューでこの件について次のような趣旨で語っている。

「サンタクロースは、正教会の伝統の中には存在しない。しかし、子供たちの夢をこわさないように、バランスのとれた対応が求められる」。

正教会の降誕祭の伝統と「子供たちの夢」——双方を正しく理解したうえで叡智あるバランス感覚が求められているのは、ロシアでも日本でも共通の課題のようである。

聖週間

降誕祭の齋が終わって、お祝いの食卓を囲むのは、降誕祭の聖体礼儀後となる。

「СВЯТКИ(聖週間)」の始めである。聖週間の「週間」は複数形。主の神現祭前日まで続く。ここで、正教会伝統の深さに改めて気がつくのは、



聖週間には齋が無いということである。正教会は、

齋をする期間と、齋をしない期間を教えている。これは、話が少し

とぶが、復活祭前の大齋の間のご祈祷にたくさんの伏拝が定められていて、復活

祭を迎えると五旬祭まで伏拝をしないことが定められていることと似ている。

降誕祭に限らず、正教会はこのような形で祭日の教会的な祝い方を教えているのである。レストランに行くとか、コンサートに行く、デパートにプレゼントを買いに行くというのもお祝いの仕方の一つであるが、教会の奉神礼と伝統に従うと「霊的な祝い方」を知ることができる。

降誕祭→聖週間→神現祭

先ほど、聖週間は降誕祭から神現祭前日まで続くと書いた。この「降誕祭→聖週間→神現祭」

の関係をもう少し詳しく見ると次のようになる。

「降誕祭前日(СОЧЕЛЬНИК)→降誕祭→聖週間→神現祭前日(СОЧЕЛЬНИК)→神現祭」。

右記のように、降誕祭前日と神現祭前日は、ロシア語では両方とも「СОЧЕЛЬНИК(ソチェリニク)」という。「СОЧЕЛЬНИК(ソチェリニク)」とは「厳しい齋」の意味であるが、実は教会の一年間のサイクルの中で、祭日の前日を「СОЧЕЛЬНИК(ソチェリニク)」と言うのは、降誕祭と神現祭だけである。どうしてこうなるのかというと、昔、まだ教会に対する迫害があり、しばしば教会に集まる機会を持つのが困難だった頃に、降誕祭と神現祭を同じ日に一つのご祈祷で記憶していたことの名残なのである。

そう言われてみれば、奉神礼的にも降誕祭と神現祭は聖体礼儀の中で、「聖三詞」の代わりに「ハリストスによつて洗を受けし者…」が歌われるなど、ご祈祷の共通点が見えてくる。

後に(六世紀以降)、降誕祭と神現祭をそれぞれの日に記憶するようになってからも、昔一つのご祈祷だった習慣がそのまま奉神礼の中に残ったわけである。今ではそれぞれの日に祝うようになった降誕祭と神現祭——この二つの祭日の

間の期間を取り持っているのが聖週間である。

そしてこの期間にもう一つ忘れてはならないのが主の割礼祭である。ウクライナ地方の降誕祭の民族的宗教歌(カリヤートカ)には「三つの祭日が一度にやってくる」と歌われている。即ち降誕祭(一月七日)、割礼祭及び聖ワシリイ祭(一月十四日)、神現祭(一月十九日)である。

※以上は、二〇〇七年の西日本教区報に掲載した原稿の一部。